

ヨエル書とラオデキアのセブンスデー・アドベンチスト教会-第十四号

Jeff Pippenger

2025-12-20

十四番

「神の驚くべき御業」の歴史は、「いつまでか」という予言的な問いによっても表されている。それら二つと、ほかの多くの象徴において示されている歴史は、十四万四千人が封印される時期を指し示している。その時期には、真のものと数多くの偽の「後の雨」のメッセージをめぐる論争がある。本物の「後の雨」のメッセージはただ一つである。神がその驚くべき御業を行われる聖なる歴史の物語の筋は、「新しいぶどう酒」が一方の人々からは断たれ、他方の人々には注がれるというヨエル書の文脈の中に位置づけられている。

ヨエル書には、注意すべきいくつかの対比がある。「たとえ (parable)」という語の語源は「並べて置く」を意味し、本質的に二つの種類の対比を含む。私たちは以前、ヨエル書の「対比」のいくつかに触れ、エルサレムを支配する酒に酔った者たちがかぶる「誇りの冠」が、栄光の冠をかぶる者たちと対比されていることを指摘した。まだ、喜びの象徴が恥と反対でありながら、その対応物でもあることについては述べていないが、実際にそうであり、そのことを示すつもりである。アルファとオメガの主題もヨエル書に見いだされ、「初めが終わりを示す」というその原則は、『使徒行伝』にあるペテロの二つの説教によっても確認されている。

使徒の働き2章は、ペンテコステの午前9時（第3時）に起こり、3章は第9時（午後3時）、すなわち夕のささげ物の時である。2章ではペテロが宣べ伝えるメッセージは私宅の二階の部屋で語られるが、3章での彼の説教は神殿で語られる。両方の集会での悔い改めへの招きが、両者を結び付けている。同じメッセージが二つの地理的場所で語られ、それは外庭と神殿のあいだに分割されたペンテコステのメッセージにおける二重性の象徴を表している。黙示録11章では、ヨハネは神殿を測るよう命じられるが、外庭は異邦人に与えられたので除外するようと言われる。

そして、わたしに杖のような葦が一本与えられた。御使いが立って言った、「起きて、神の神殿と祭壇と、その中で礼拝する者たちとを測れ。しかし、神殿の外庭は除いて、これを測ってはならない。これは異邦人に与えられているからである。彼らは四十二か月の間、聖なる都を踏みにじるであろう。」ヨハネの黙示録 11:1, 2.

したがって、二つの説教が二重に示されていることと、その説教の場所が分かれていることは、ヨエル書における後の雨の対象となる二つの聴衆を明らかにしている。一方は神殿の外にいる異邦人であり、もう一方は神殿の中にいるユダヤ人である。生ける者の裁きにおいては、裁きはまず神の家から始まる。9/11から日曜法に至るまで神殿が裁かれ、日曜法から人類の恩恵期間の終わりまで異邦人が裁かれる。その裁きは、ペテロがヨエル書に示されたものとして指摘した後の雨の期間に起こる。使徒の働き2章と3章で見られる外

庭（異邦人）と神殿（神の教会）の区分が表しているものは、ヨエル書における初めの雨と後の雨の区別でもある。初めの雨は9/11に到来し、神殿が裁かれている間に注がれる。その過程が終わると、後の雨が外庭にいる異邦人の上に注がれる。

それゆえ、シオンの子らよ、喜べ。あなたがたの神、主にあって喜べ。主はあなたがたにほどよく前の雨を与え、また、初めの月に、あなたがたのために、雨、前の雨と後の雨を降らせてくださる。ヨエル書 2:23。

今のところ私の論点は、喜びと恥じることとの預言的な区別を明らかにすることではない。しかし、この節は後の雨のメッセージのゆえに「喜べ」と神の民に告げている。後の雨のメッセージは、神の民のうちに預言的な喜びを生み出す。とはいえ、前の雨（初雨）に続く後の雨という主題は、退けられながらも不思議とされたつまずきの石の比喩である。やがて頭石となる隅のかしら石という象徴こそが、神とその民の目に不思議なものなのである。

驚くべき石は、予言のアルファとオメガを表している。予言的適用におけるアルファとオメガの原則は、御言葉の中でアルファとオメガご自身によって繰り返し示されており、そして彼は御言葉である。この理由により、この原則について明らかにされたことは、永遠にわたって私たちと私たちの子どもたちに明らかにされている。1863年は聖書の予言の頂石であり、また1844年から1863年に至る第三の天使の期間の頂石でもある。1844年は礎石、1863年はその予言的期間の頂石であった。1844年から1863年は確立された予言の期間であり、538年から1798年に至るのと同様に確立されている。神が確立された事柄を人類が知らないという事実は、その事柄を確立されていないものにするわけではない！

前回の記事は、次の一節で締めくくりました。

私には、神の民に対する彼の関係が、ある点で、モーセのイスラエルに対する関係に似ていることが示された。逆境にあってモーセに不平を言う者がいたように、彼に対してもこれまで不平を言う者がいた。

1863年、ジェームズ・ホワイトは「ある点では」「イスラエルにとってのモーセ」であった。

1844年から1863年までの期間は、紅海での解放から最初のカデシュに至る期間によって予表された。最初のカデシュはアルファであり、第二のカデシュはオメガであって、カデシュへと至る二つの四十年の期間をもたらし、いずれも反逆に終わった。

『預言の霊』は紅海横断を1844年の大失望と結びつけている。聖書は紅海横断を十字架と結びつけ、ホワイト夫人は、十字架における弟子たちの失望が1844年の大失望を予表していたことを確認している。主のみこころは、直ちに約束の地に入る事だった。そして約束の地への入口を示す地理的な目印はエリコであった。ちょうどこの2025年12月第2週、考古学者たちが古代エリコを発掘したところ、彼らの当惑したことに、そこで見つかった崩れた城壁は、包囲戦の際に常に見られるような内側ではなく、すべて外側に倒れていた。古代の包囲戦では、城壁は打ち壊され、内側へ押し倒されるものだ。だがエリコは違った。

そこで、祭司たちがラッパを吹き鳴らすと、民は叫んだ。民がラッパの音を聞き、大声で叫ぶと、城壁はまっすぐに崩れ落ち、民はおのおの自分の前方へまっすぐに町へ上って行き、町を攻め取った。ヨシュア記 6章20節。

考古学者たちは食料の入った壺も発見し、それによって城壁の崩壊が長期に及ぶ包囲戦の結果ではなかったことが明らかになった。また、聖書のエリコ陥落の記述が、彼らが丘や斜面を上ってエリコに「上っていった」とする理由について、考古学者たちの間にあった疑問にも答えが得られた。彼らは今では、それが城壁が外側へ倒れたときに生じた瓦礫の斜面を指していると分かっている。

約束の地に入る際、最初に立ちはだかった障害は、影響力と富の都市エリコであった。エリコは1863年であり、また、エリコは聖書の預言の主題であって、日曜法の時代の例証であるだけでなく、その陥落と再興にも関連している。さらにエリコには、独自の具体的な預言的呪いが宣告されていた。ヨシュアはエリコを再建する者に呪いを宣告し、そうすることで、その呪われた町を再建する過程で、エリコを再建する者は長子と末子を失うことになること示した。一人は土台を据えるときに、もう一人は門を建てる時に失われることになっていた。その預言は成就し、その成就の記録は聖書に記されており、これによってエリコは確立された聖書的象徴となった。

その歴史的終焉の中に、さらにその預言的呪いと、ついでその預言の歴史的成就において、私たちは1863年にエリコについて語る三人の証人を見いだす。これら三つの証言はいずれも1863年に適用されるべきである。これら三人の証人は、三人のモーセがそれぞれの四十年の期間の終わりにおいて預言的に立つのと同じように、共に並び立つ。その四十年の期間の一つはミラー派の歴史と明確に一致しており、各四十年の期間の終わりにおけるモーセの三つの表象が、1863年の歴史-すなわち第三の天使の歴史-と一致することを確証している。

モーセの四十年に関する三つの証しのうち二つはカデシュで終わり、三番目の結末はヨルダン川、第二の結末は紅海であった。最初の四十年の結末は、モーセがエジプトから逃れたことだった。これら三つはいずれも、アブラハムのエジプトでの四百三十年の奴隷状態に関する預言の成就として、エジプトからの脱出を述べている。

モーセの生涯における三つの四十年期は、その各期の終わり（締めくくり）がエジプトからの解放の型を表しており、エジプトでの奴隷的束縛の中への捕囚とそこからの解放に関するアブラハムの預言の成就であった。アブラハムの契約の約束における預言された救出者として、モーセ自身は、その名の示すとおり、水から救い出されることから歩みを始めた。その後モーセは、神の民を紅海の水を渡らせ、さらにヨルダン川に象徴される解放の岸辺へと導いた。モーセの生のアルファはナイルの水からの救いであり、オメガはヨルダン川の水に象徴される救いであった。彼の名を決定づけたその体験、すなわち水から引き上げられた出来事が、モーセの生のアルファを物語っている。そして敬虔な両親は、その幼子が死の宣告を受けていることを知っていた。彼が四十年後にエジプト人を殺したのち、同じく死の宣告を受けることになるのと同様に、死の宣告から救われねばならないと知っていた敬虔な両親は、彼のために箱舟を用意し、それはヘブライの世界からエジプトの世界へと渡っていった。ちょうど四十年の終わりにモーセが、エジプトの世界を

後にしてヘブライの世界へと向かったのと同じように。

モーセは、水からの救いにおいてノアの物語を再現した。アブラハムの四百三十年の契約に関する預言の「解放者」としてモーセが最初に言及される場面は、神が人類と契約を結んだ歴史の反復であり、したがって、選ばれた民に関するアブラハムの契約の預言と、全人類への契約の約束とを結び合わせるものだった。このことから、幼子のモーセがファラオの娘に引き渡される出来事には洗礼が示されている。すなわち、親の行いによって死が認められ、埋葬は水に浮かぶ箱舟によって表され、復活はファラオの娘に当たる。

モーセの生涯は、ノアの箱舟によって予表された洗礼から始まる。したがって、当初から数字「8」がモーセに結びつけられることになる。というのも、彼の契約関係の根はノアの契約に由来する「8」という数から始まり、また彼の務めは「八」日目の割礼の儀を制定することだったからである。彼はまさにその儀式によって試され、失敗した。モーセの生涯は洗礼から始まり、四十年後には（エジプト人の死）があり、それがエジプト人としてのモーセが死に、純粹にアブラハムの子となる時点を示した。モーセの最初の四十年の始まりと終わりは、洗礼によって象徴されている。最初のもはヘブライ人からエジプト人への移行を示し、最後のもはエジプト人からヘブライ人への移行を示した。そのさらに四十年後、モーセは神の民を紅海の洗礼を通して導き、ヨルダン川での洗礼へと向かったが、彼自身はそこには到達しなかった。

ヨシュアの導きのもと、神の民はモーセなしに約束の地へ入った。というのも、彼はヨルダン川での洗礼の時を迎える直前に死んだからである。モーセは「あなたの神、主はモーセのような預言者を起こされる」と言い、ペテロもそれを繰り返して語った。モーセによって予表されていたその預言者はキリストであり、彼はまさにモーセが終えたところから働きを始められた。彼はご自身の洗礼において働きを始められ、その洗礼は、古代イスラエルがヨルダンを渡って約束の地に入ったとき、ヨシュアが彼らに洗礼を施したまさにその場所で行われた。福音書は、ヨハネがベタバラで洗礼を授けていたと伝えている。そこは渡し場であり、その名は「渡し場」を意味する。

紅海はエジプトの反逆の象徴であり、この文脈においてモーセの預言的な証しが真実であることを示している。ナイル川から紅海（ときに「川」とも呼ばれる）を経て、さらにヨルダンへ、『水から救い出された者』を意味する名を持つモーセは、救いの水においてその証しを始め、また終える。そして、それらの水のそれぞれが、二種類の礼拝者を表す。

モーセの最初の四十年は第一の天使のメッセージを表し、次の四十年は第二の天使、さらに三番目の四十年は第三の天使に当たる。三人の天使はそれぞれ特有の預言的特質を備えており、たとえば三つすべてのメッセージが第一のメッセージの中に表されているといった具合である。私たちはこの現象を、ダニエル書の最初の三章と関連づけて、長年にわたり公に示してきた。

ダニエルは第1章で神を恐れ、バビロンの食事を口にすることを拒んだ。続いて行われた食事と容貌に関する第二の試験において神は彼に栄光を与え、これがネブカドネザル自身による裁き、すなわち第三の試験へとつながった。ダニエル書第1章は、黙示録第14章の第一の御使いに当たり、「神を恐れよ」「彼に栄光を帰せよ」（これは第二の食事と

容貌の試験においてダニエルが行ったこと）、「ネブカドネザルの『裁きの時』が来たからである」と告げている。

モーセの生涯の最初の四十年は、彼の両親が神を畏れたために始まった。ファラオの娘が水の中の箱舟を見たとき、モーセは第二の試練、すなわち見ることによる試練に合格した。するとファラオの娘は、彼は死ぬべきではないと判断した。裁きはまた、最初の四十年の終わりにも臨んだ。彼がエジプト人を打ち殺し、エジプトから逃れなければならなくなったときである。

第二の四十年の期間に、黙示録14章の第二の天使が「バビロンは倒れた」と告げることは、エジプトの滅びによって予表されていた。その滅びにおいて、その四十年の終わりには神の力の驚くべき顕現があり、1844年の真夜中の叫びの際、第二の天使のメッセージの終わりにも同様のことがあった。

第三の四十年間は、事実上、会衆のほぼ全員に死の裁きが宣告されることから始まり、その会衆の指導者に死の裁きが下されて終わる。

ホワイト夫人は、私たちの働きは三天使のメッセージを一つにまとめることであると示している。

主は、その不義のゆえにこの世をまもなく罰せられる。彼は、彼らに与えられている光と真理を拒んだために、宗教諸団体をまもなく罰せられる。第一、第二、第三天使の使命を結合した大いなるメッセージは、世界に伝えられなければならない。これが私たちの働きの中心的な務めであるべきだ。セブンスデー・アドベンチスト聖書注解 第7巻 950ページ。

モーセの最初の四十年は黙示録14章の第一の天使を表し、次の四十年は第二の天使、三番目の四十年は第三の天使を表す。私たちの「大いなるメッセージ」は、「第一、第二、第三の天使のメッセージ」を結合することであり、それによってモーセの三つの象徴すべてを1863年に位置づけ、ゆえに日曜法の時には三人のモーセがいることになる。

1844年から1863年は、カデシュへと至る二つの四十年の期間の双方に共通する二つの証しを含んでいる。靈感は、第一と第二なしには第三は存在し得ないことを示しているので、モーセの生涯の最初の四十年もまた1844年から1863年を表していなければならない。1863年に、モーセはエジプト人を殺し、また権威の杖で岩を打ち、さらに金の子牛の反逆の歴史において神の栄光を見せてくださるよう求めている。1863年および日曜法の時点で三人のモーセが存在し、彼らはいずれも四十歳である。

モーセの三つの時期は、それぞれ水による救いを含んでいる。籠に入れられたモーセは紅海を渡るモーセと対応し、さらにそれはヨルダン川でのモーセの二度の出来事と対応する。すなわち、ナイル川、紅海、そしてヨルダン川での二度である。三つの各時期には救いの水が象徴されている。というのも、それらは皆、後の雨の期間に救いの水が注がれる時期と一致しているからである。

第三の四十年期の終わりに、モーセは杖で岩を打った。第二の四十年期の終わりに、彼の杖は紅海を二つに分けた。第一の四十年期の終わりに、彼はエジプトの権威を示す杖を退

け、自分の民とともに苦しむことを選んだ。

第一の期間の終わりに一人のエジプト人が死に、第二の期間の終わりにはエジプトの軍隊と長子と指導層が死んだ。第三の期間の終わりには、イスラエルの民もアロンもモーセも、皆死んでいた。これらは三つの並行する歴史であり、「line upon line」の原則で、それぞれが1844年から1863年に至る期間-第三の天使の歴史-を表している。これはさらに、9/11から日曜法に至る期間と、救いの水が注ぎ出されるペンテコステの季節をも表している。

モーセはカデシュでの二度の反逆のいずれにも立ち会っており、カデシュでの反逆はいずれも、それぞれの時期における頂石である。これらはいずれも1863年を表しており、1863年はまた、1844年のアルファに始まり1863年の頂石に至る第三天使の期間の頂石でもある。礎として始まり頂石として終わる石が放つ驚くべき光を考えると、頂石は予言において常により大きいことがわかる。ペンテコステの季節の始まりに降るわずかな滴が、ペンテコステの日という頂石における完全な注ぎ出しへと至ることは、この真理を示している。

9/11に散らし注ぎが始まり、それは日曜法での完全な注ぎ出しで終わる。この真理は、第二、すなわちオメガのカデシュにおけるモーセの罪が、最初のアルファのカデシュの反逆よりも大きな罪であることを示している。アルファの反逆は民族全体の死をもたらし、オメガの反逆は一人の人間（モーセ）の死をもたらしたが、その一人の人間の罪は民族全体の共同の罪よりも重かった。罪を犯す者は死に、その次元ではモーセの罪と他のどのイスラエル人の罪とも区別はない。しかし預言的には、モーセがキリストを二度打ったことのほうが重かった。というのも、それがその四十年の期間の締めくくりだったからである。

第二のオメガのカデシュにおけるモーセの反逆は、ヨシュアとカレブのメッセージを退けたイスラエルの子らの反逆よりも大きな罪であった。モーセは預言的に1863年に位置づけられ、そこにおいて彼はその反逆のゆえに荒野で死ぬ。モーセはまた1863年に立っており、そこでは、かつての契約の民が自らの反逆のゆえに荒野で死ぬ。しかし、モーセはその反逆には加わらなかった。1863年は日曜法と一致しており、アロンが金の子牛の件で犯した反逆も同様である。カデシュ、1863年、そして日曜法と一致するその歴史において、モーセは神の栄光を見ることを祈っている。

カデシュは1863年を表しており、モーセは二つのカデシュの双方にいる。したがって、いずれも頭石である二人の聖書的証人に基づき、カデシュで終わらない第三の四十年の期間もまた1863年を表していると確証される。そこでは「聖別されていないモーセ」が、岩を退けることによって、キリストを新たに十字架につけている。1863年、すなわちシナイで律法が与えられたとき、「聖別されたモーセ」は神の御性質を求めている。1863年において、モーセは賢いおとめでもあり、同時に愚かなおとめでもあることを表している。

「パリサイ人と取税人は、神を礼拝しに来る人々が二つの大きな部類に分けられることを表している。彼らの最初の二人の代表者は、この世に生まれた最初の二人の子どもに見いだされる。」キリストの実物教訓、152。

カデシュで、また1863年には、モーセは「神を礼拝する者たちが二つの大きな階級に分けられる」ことを表している。モーセは、ペテロと同様に、十四万四千人の一例である。

「パリサイ人と取税人に代表されるそれぞれの人々にとって、使徒ペテロの歩みには教訓がある。弟子になって間もないころ、ペテロは自分は強いと思っていた。彼はパリサイ人のように、自分では『他の人々のようではない』と考えていた。キリストが裏切られる前夜、弟子たちに『あなたがたは皆、今夜、わたしのゆえにつまずくであろう』と前もって警告されたとき、ペテロは自信満々に『たとい皆がつまずいても、私はつまずきません』と言い切った。マルコ14:27, 29。ペテロは自分の危険を知らなかった。自己過信が彼を誤らせた。自分は誘惑に打ち勝てると思っていたが、ほどなくして試練が来ると、彼は呪いの言葉を使い、誓って主を否んだ。」キリストの実物教訓、152。

日曜法、すなわち1863年に、ペテロは二つの階級を表している。それは、獣の刻印を受ける者たちと神の印を受ける者たちである。イエスがシモンの名をペテロに変えたとき、それは十四万四千人を象徴していた。その理解は、英語のアルファベットにおける文字の位置番号を用い、ペテロという名の各文字の番号を掛け合わせることによっても象徴されている。同じ手法を1863に用いると、144が得られる。

1863年と一致するモーセの三つの象徴のうち二つは、第三の期間もまた一致しなければならないことを確証する。カデシュの二本の線は、賢い乙女と愚かな乙女の物語を指し示し、第三の期間は、神の業を成し遂げるために人間の努力を用いようとする試みを指し示す。モーセがエジプト人に対してそうしたように、人間の力に頼ることは、神に定められた権威よりも人間の権威を信頼することを表している。

ホワイト夫人は、彼女の夫の「神の民との関係は、ある点では、モーセがイスラエルに対して持っていた関係に似ていた」と述べている。1863年には、モーセはジェームズ・ホワイトによって象徴されていた。1863年、ジェームズ・ホワイトは、エジプト人を打ち殺し、キリストを二度目に打ち、ヨシュアとカレブによって提示された「安息」のメッセージを拒んだ反逆者たちのために祈っている。モーセは、岩を二度打ったときには愚かな乙女であり、イスラエルの反逆者たちのために執り成したときには賢い乙女でもある。

この記事は、モーセが1863年におり、金の子牛の反逆によって表される並行する歴史において神の栄光を見せられる、民数記14章の箇所締めくくります。

この箇所では、イスラエルの反逆者たちにいつまで対処しなければならないのかと「いつまで」と問われており、これはイザヤが6章で主に尋ねたのと同じ質問です。民数記は、この歴史を、天使たちがイザヤ書6章3節で示しているように、地が神の栄光で照らされる時期に位置づけています。9/11は1844年から1863年に至る歴史の礎石であり、日曜法はその冠石です。民数記の舞台は、主がヨシュアと契約に入られる中で古代イスラエルが退けられていくさなかにあり、まさしく「ぶどう園の歌」あるいは「ぶどう園のたとえ」の例証にほかなりません。

すると、会衆はみな声をあげて叫び、人々はその夜、泣いた。イスラエルの子らは皆、モーセとアロンに向かって不平を言い、会衆全体は彼らに言った。「ああ、私たちがエジプトの地で死んでいればよかったのに！

それとも、この荒野で死んでいればよかったのに！ それに、なぜ主は私たちをこの地に導き、剣に倒れさせ、私たちの妻や子どもたちを餌食とされるのか。エジプトへ引き返したほうが、私たちにとってよいのではないか。」そして彼らは互いに言った。「指導者を立て、エジプトへ帰ろう。」

そのとき、モーセとアロンは、イスラエルの子らの全会衆の前で、ひれ伏した。ヌンの子ヨシュアとエフネの子カレブ、すなわち、その地を偵察した者たちのうちの二人は、衣を裂いた。彼らはイスラエルの子らの全会衆に向かって言った、

私たちがそれを探るために通ったその地は、きわめて良い地である。もし主が私たちを喜ばれるなら、主は私たちをこの地に導き入れ、これを私たちに与えてくださる。乳と蜜の流れる地である。ただ、主に背いてはならない。また、その地の民を恐れてはならない。彼らは私たちの餌食となる。彼らの守りは彼らから去り、主は私たちと共におられるのだから。彼らを恐れるな。

しかし、会衆は皆、彼らを石で打ち殺そうとした。そのとき、主の栄光が、イスラエルの子らすべての目の前で、会見の天幕に現れた。主はモーセに言われた、「この民はいつまでわたしを侮るのか。わたしが彼らの間で行ったすべてのしるしにもかかわらず、いつまでわたしを信じないのか。」

わたしは疫病で彼らを打ち、彼らを嗣業から断ち、あなたから彼らよりも偉大で、より強い国民を起こす。

モーセは主に言った。「それでは、エジプト人はこのことを聞くでしょう。（あなたが御力をもってこの民を彼らの中から導き上られたのですから。）そして彼らはこの地の住民にそれを告げるでしょう。彼らは、主であるあなたがこの民のうちにおられ、主であるあなたが彼らに面と向かってお見えになり、あなたの雲が彼らの上にとどまり、昼は雲の柱で、夜は火の柱で、あなたが彼らの前を進まれることを聞いています。今、もしあなたがこの民をひとりの人のように一度に殺されるなら、あなたの名声を聞いた諸国の民はこう言うでしょう。『主はこの民を、彼らに誓われた地に導き入れることができなかつたので、荒野で彼らを殺したのだ』と。」

そして今、どうか、あなたが仰せになったとおりに、わが主の御力を大いならしめてください。「主は忍耐強く、豊かなあわれみをもち、咎と背きを赦す。しかし罪ある者を決して無罪とはされず、父祖の咎を子らに報い、三代、四代に及ぼす」と。どうか、あなたのあわれみの大いさにしたがって、この民の咎をお赦しください。あなたがこの民を、エジプトから今に至るまで赦してこられたように。

主は言われた。「あなたの言葉どおり、わたしは赦した。しかし、わたしは生きていますと誓って言う。全地は主の栄光に満ちる。」

わたしの栄光と、わたしがエジプトと荒野で行った奇跡を見たこれらすべての者たちは、今まで十度もわたしを試み、わたしの声に聞き従わなかったから、彼らは必ず、わたしが彼らの先祖に誓った地を見ることはない。わたしを怒らせた者のうち、だれひとりそれを見ることはない。ただし、わたしのしもべカレブは別である。彼のうちには異なる霊があり、全くわたしに従ったので、彼が行ったその地へ彼を導き入れ、彼の子孫はそれを所有するであろう。（さて、アマレク人とカナン人は谷に住んでいた。

) 明日、向きを変えて、紅海への道から荒野へと向かえ。

主はモーセとアロンに言われた。「いつまで、わたしに逆らってつぶやくこの悪しき会衆を、わたしは忍ばねばならないのか。イスラエルの子らがわたしに向かってつぶやくそのつぶやきを、わたしは聞いた。彼らに言え。『わたしは生きている、と主は言われる。あなたがたがわたしの耳に語ったとおり、わたしはあなたがたに行く。あなたがたのしかばねはこの荒野に倒れる。あなたがたのうち、数えられた者で、二十歳以上の、わたしに向かってつぶやいた者はみな、必ず、わたしがあなたがたをそこに住まわせると誓ったその地に入ることはない。ただし、エフネの子カレブとヌンの子ヨシュアは別である。あなたがたが餌食になると言ったあなたがたの幼子たちは、わたしがそこに入らせる。彼らは、あなたがたが侮ったその地を知るようになる。しかし、あなたがたについては、あなたがたのしかばねはこの荒野に倒れる。あなたがたの子らは四十年の間荒野をさまよい、あなたがたの淫行の咎を負い、あなたがたのしかばねがこの荒野で絶え果てるまでそうする。あなたがたがその地を偵察した日数に応じて、四十日、一日を一年に当て、あなたがたは四十年間、自分の咎を負う。そのとき、あなたがたは、わたしがあなたがたから離れ去ったことを知るようになる。』」

主であるわたしは言った。わたしは必ず、わたしに逆らって集まったこの悪しき会衆すべてに、それを行う。彼らはこの荒野で滅び、そこで死ぬ。モーセがその地を偵察させるために遣わした人々のうち、戻って来て、その地についての中傷を言い立て、会衆全体を彼に逆らってつぶやかさせた者たち、すなわちその地について悪い報告を持ち出したその者たちは、主の前で疫病によって死んだ。

しかし、地を探りに行った人々のうちのヌンの子ヨシュアとエフネの子カレブは、なお生きていた。民数記 14:1-38。

これらの考察は次回の記事で続けます。